

自然とのふれあい（その五）

——冬・科学性を育てる——



齋藤芳子

風の日の保育

夜半の風の吹き荒れた朝、空気はさすように冷たい。急いで林の下道を通って、幼稚園の裏門から運動場に入る。

松の小枝の大きいのが二本、運動場の真中まで吹き飛ばされている。あちこちのくぼみや運動場の片すみに、秋には色美しかった紅葉や桜、雑木の枯葉が、吹きだまりになっている。ふと見ると、手のひらの大きさ位の丸い枯草のようなものが眼にとまる。拾ってみると、小鳥

のひなの巢立った後の古い空巢が、こずえから吹きとばされて落ちたらしい。枯草とビニールを細かくちぎったものでお椀のように丸くつくつてある。

せぼめられた自然の中で、ビニールを巢作りに使っているのを、はじめて発見した。園児たちにも、早く見せて観察させたいと砂場の側を急いで歩く。

砂場の中に何かキラッと白く光るものが見える。ガラスのかげらでも落ちていれば危いと思って、しゃがんでみると、三センチ位の大きい霜柱が、砂を持ち上げて、砂の中に、たくさん立っていた。

朝日に霜柱がとけないうちに、園児たちに見せたいと思って、大急ぎで保育室の方へ向う。

遠くから姿を見つけた園児たちが、

「先生、おはよう…」と走って来る。

「先生、手に持っている物何？」

先生「運動場の隅に落ちていたので拾って来たの、何だろうね」

「見せて、見せて」と皆で大きわざ。

「あっ、これ小鳥の巢だよ、草とビニールでお椀みたい  
に作ってある」

「風で小鳥の赤ちゃん落ちて死んだのではない？」

「小鳥は春に赤ちゃん生まれるから、もう、とんでしま  
って空巢だよ」

「この巢、ちょっと引張っても、こわれないよ、丈夫に  
作っているね」

先生「一つしかない巢だから、大切にしておきなよ、先生や、  
おともだちにも見せてあげて」

「その前に、先生いいもの見つけたから、砂場に入らな  
いで、しゃがんでお砂を見てごらん」

「あっ、霜柱だ、大きい霜柱だね」

「ガラスみたいだね、はじめて見た」

「畑や土のところだと、寒い時にあるよ。僕見たことあ  
る。コンクリートの所はだめだけどね」

「もっと探しにいこう」と散らばってゆく。日陰の土の  
あちこちで、足ぶみをしている。霜柱をふみつぶしてい

るのだ。

「先生、霜柱ふむとサクサクと音がするよ。氷よりやわらかいし、おもしろいよ」

先生「松の木の折れた枝を、つまづくと危いから、テラスの横に、みんなで力を合せて『ヨイシヨ、ヨイシヨ』と運んでちょうだい」

大きな二本の松の枝を、十人位のこどもが、「エンヤコラ、エンヤコラ」と、寒い中を楽しそうに、運んでいった。

先生「ありがとう、片づけてもらったお礼に、松葉すもうを作って、遊んであげよう」

テラスの日だまりに集ってきた園児たちと、針のような松葉を、小枝からみんなちぎり取って、葉先の針をそろえて、一にぎり程の松葉をゴム輪でとめる。

次は画用紙に、ちょんまげのおすもうさんの顔や、手を書いて切りぬく。

松葉の束の元を切りそろえて、切りぬいたおすもうさ

んの顔、手、松の束に差し込む。これで松葉力士の出来あがり。

空箱や机の上に、丸く土俵を書く。おすもうさんを、針を足にして、二人向い合わせて立たせる。

指先で土俵の側を軽くトントンとたたくとおすもうさんの足が、こぎざみに動き出す。

土俵の外へ出たり、倒れたりしたら負けになる。作ったこどもたちは、夢中になって、ハッケヨイヤ、ノコッタ、ノコッタと、応援している。

「僕も自分のを作りたい」

「一緒に作ってすもうをしよう」と、友達と組んで、そこから、松葉だらけにして、松葉のおすもうさん作りを教えたり教えられたりしながら一生懸命に作っている。

夜半の嵐のくれた松の小枝、小鳥の空巢、霜柱で、自然の現象に気づいたり、自然物の教材で生き活きと、造形したり、遊んだり観察したり、一日中たのしい保育だった。

松ぼっくりも、ダンボールにいっぱい拾って、そのう

ち色でそめて、モビールでも皆でつくろうね。

### 雪の日の保育（第一日目）

立春が近いというのに、昨日から降り続いた雪は、三十センチ程に積っている。

雪の多い日は、必ず雪と遊ぶことにしている。

先生方は門から保育室へ行くまでの道の除雪作業をして、幼児の通路をつくっておく。

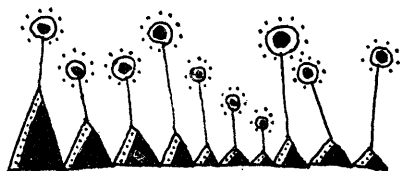
運動場の雪の原や、雪の重みで、たわわになっている樹々の枝はそのままにして、幼児の観察に供する。

保育室のストープは、どんどんたいて、雪道をぬれてくる子や、ぬれた手袋を干すようにしておく。

今年最後の積雪だから、一日中雪を教材として、戸外活動をいきいきとやりたいと思う。

雪をふまないように、登園してきた子から、雪だるま作りにかかる。年長、年少各組の前に、出来るだけ大きく、だるまの顔なども、考えながらつくる。

最初に雪のまるいボールをつくって、踏まない、軟い



雪の上をコロコロと丸くなるようにころがす。雪の玉が大きくなり、重くて動かなくなったら、皆で押しころがして、日陰の所にすえる。だるまさんの首も、少し小さめに丸く作って胴に重ねる。一輪車や、スコップで雪を運んで、だるまさんの胴や顔をきれいに、雪をたたきつける。

美容師さんのように、だるまの眼やくちびるなど、いろいろなもので工夫してつけている。頭に砂場のバケツや自分の帽子をかぶせたり、南天の赤い実の房を、だるまの頭にさして女のだるまさんだなど、得意になっている。

年齢差で、いろいろ創造性の違いが分る。テラスの日だまりの端で、雪兎をつくっている子がいる。皆にふまれたら可愛そうだからと、古い金のお盆を出してやる。

日陰の方においておけば、明日までとけないんじゃないかなあ—と話しておく。

雪の創造活動の終わった後は、雪合戦で走りまわっている。

「雪の玉は、お尻か足をねらって投げること」と約束する。おべんとうの頃は日ざしもよくなり樹々の葉すえから、露がしたり落ちていた。屋根の上の積雪も、二十センチ程ずり落ちて、大きなつらからも雨だれのよう露がおちている。

「雪の日は軒下を歩くと、屋根からずり落ちた雪の固まりや、大きいつらが頭にささってけがをするから」と、観察かたがた注意する。金の洗面器に、大きいつららや、氷などを山もり入れてストープの上のせておく。

婦りに園児達がのぞいて、皆水になっているのでびっくりして教えにきた。それをそのままテラスのコンクリートの上において、明日来たらどうなっているか見て教えてねと、話合ってさよならする。

## 第二日目

立春近くの春の淡雪は殆んどけて、運動場は、大雨の後のようにぬかるんでいる。

「雪だるまの片目が落ちてゐるよ」

「雪だるまがかたむいて少し小さくなった」

「雪うさぎも片目が落ちて小兎になった」

「洗面器の水は、すっかり氷になったよ」

「雪どけの大水で運動場で遊べないね」

「どンドン水流れてたから、お日様出れば、すぐかわくよ」

「どこまで流れるか、見にゆこう」

長靴をはいて、水の旅と一緒にハイキングだ。園内の水は園庭の小さな測溝へチョロチョロ流れていく↓門をくぐって外の道端の広い深い測溝に入っていく↓外の坂道の大きい測溝を早い勢いで水が走ってゆく↓橋のかかった町の大きな川に流れこむ↓船着場の海へ入った。年長児といっしょに歩いた水の旅路である。

園児たちはいきいきしていた。いい考察、思考の旅でもあったわけだ。

こどもの帰ったあと、吹きだまりの残りや、わくら葉を焼こうと思って、葉を取ってみると、わくら葉の下の

土にもえぎ色の親指程の「ふきのとう」が十個位芽を出していた。雑草の古い葉が、いてつく土にへばりついて黄色い雑草の花が蕾をつけていた。

土の上は、まだ雪がつもっているのに、地熱はもう早春で、わくらばの下に、春のいのちを育てていた。

冬来りなば、春遠からじ、とはこの事か？ 雑草の若芽がいとおしくて、わくらばをそっと若葉の芽の上にかけて、焼くのは中止。いい腐葉土になって、庭の草木を育ててくれと心でたのむ。

大切なことは、こどもと一緒に自然の中で観察し、対話をし、世話をする事。

天体、宇宙も大自然の中にあることを知る。積極的に、自然の内容に取り組み「自然のいのち」「神秘性」を知り、科学性を育てることに努力の積み重ねが必要だと思う。

(宮城県聖光幼稚園)